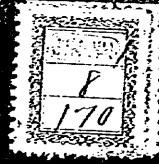


國語讀本

尋常小  
學校用

卷三



K120.8

83

3



文學博士坪内雄藏校閱  
高知縣教育會編纂



# 國語讀本

尋常小  
學校用 卷三

東京 合資會社 富山房發兌

卷三 目次

第一、春のの	一	第十二、田うゑ	十四
第二、うんどーくわい	一	第十三、五コク	十五
第三、ウマヤノ馬	三	第十四、あきなひごと	十六
第四、のきのつばめ	四	第十五、カザミ	十七
第五、かひこ	五	第十六、にじ	十八
第六、ねすみのぞーたん	六	第十七、まはりどーらん <small>(練習文)</small>	十九
第七、イサマシイ兵士	八	第十八、ヒライタ〜	二十
第八、あめ〜く小さめ	十	第十九、はす	二十一
第九、門のまへの小川	十一	第二十、きもの	二十二
第十、手がみ	十一	第二十一、あほ〜からす <small>(練習文)</small>	二十三
第十一、ホタルガリ	十三	第二十二、虫のうた	二十五
		第二十三、ミツバチ	二十六
		第二十四、二宮金次郎	二十七

山 春



第一 春のの

春がきて、あたふか  
 になりました。山は、  
 一めんにあをく  
 として、のには、  
 れんげや、すみれや、  
 たんぽ〜がさいて  
 をります。

ひばりはうたつてゐます。ちよーは  
まつてゐます。

あれ、おやへさんとおちよさんと  
草がつみ草をしてゐます。あそこまで  
かけくらをしてまゐりませう。

第二 うんどーくわい

けふはがっこーのうんどーくわい  
であります。

いま、うまのり

きよーそーが  
はじまりました。

次  
太郎さんのうまと、  
次郎さんのうまと  
が、だれのよりも  
さきになりました。  
やあ、太郎さんの





馬がたふれて、次郎  
さんが、一ばんに  
なりました。  
こちらでは、また、  
つなひきが はじ  
まりました。どちら  
がかつでございま  
せうか。

第三 烏マヤノ馬

コノ馬ヲゴラン  
ナサイ。ヨクフトッテ  
サウ 牛テ、ツヨサウデ  
ゴザイマセウ。  
白 ナハ、白トイヒマス。  
ヨク、イフコトヲ  
キイテ、オトナシイ



馬デゴザイマス。

車<sup>ヨウ</sup> 田<sup>ウ</sup>  
 白ハカモツヨウゴザイマス。車ヲ  
 ヒイタリ、田ヲタガヤシタリ、  
 イロくノシゴトヲイタシマス。  
 白ハヨクウチヲオボエテ牛マス。  
 ハナシテオイテモ、ヨソへハユキ  
 マセヌ。トチューデハナレテモ、  
 ヒトリデカヘツテキマス。

私 私ハ、チヒサイトキカラ、ヲリく  
 コノ馬ニノセラレテ、ヨソへユキ  
 今マシタ。今デハ、ヒトリデノリマス。

第四のきのつばめ

つばめがせいだして、のきの下に、  
 どろをぬりつけてゐます。あれは、  
 すをこしらへるのでございます。  
 又 ごらんなさい。又、一はきました。

こんどのは、わらをくはへて

ゐます。

あれで、

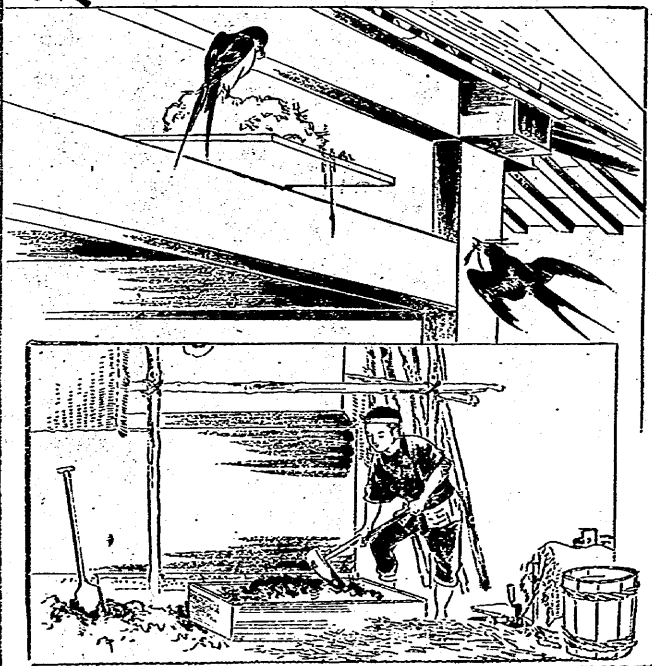
土をかた

めるので

ございま

せう。

さくわんが、



かべ土をこねるときにも、あのよーに、わらをませます。つばめは、だれにやらひましたらう。

大かた、あれは、きよねんきたつばめでございませう。春になると、きいてすをつくりませす。らいねんの春も、又、きつとまゐりませう。

第五 かひこ

雨

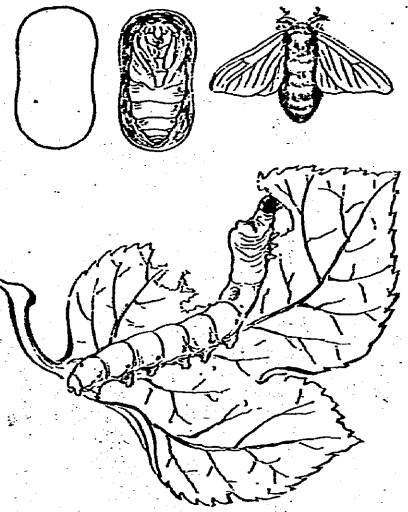
かひこが、大きく なりました。  
あれ、雨のふるよーなおとをさせて、  
くはのはをたべてゐます。

もう

もう五六日も

たったら、まゆを  
作るで、ごさい  
ませう。  
ごらんなさい。

作



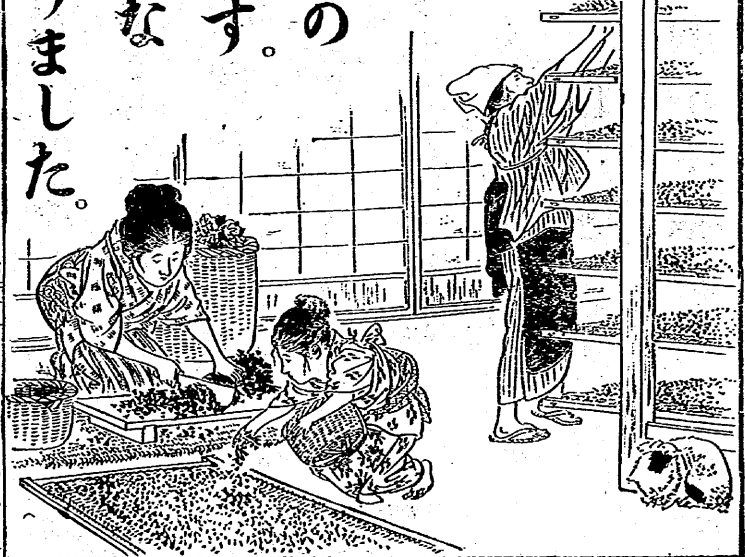
みけがかひこ

のたなの下に  
ねてをります。

この猫は、

よく、ねずみの  
ばんをします。

ゆふぶも、大きな  
ねずみをとりました。

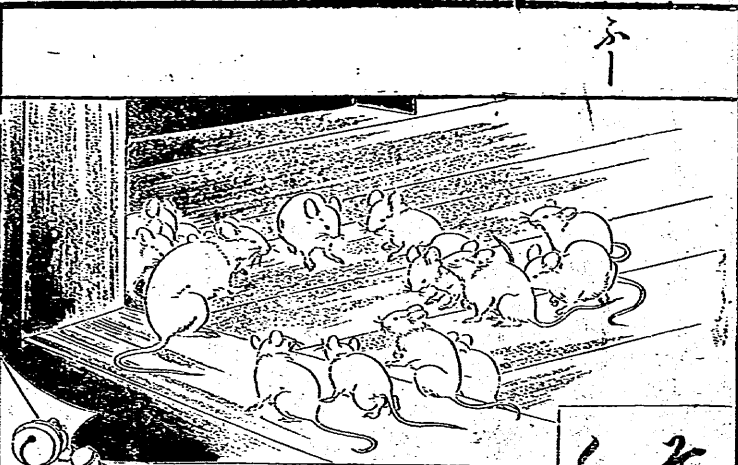




第六 ねずみのそーだん

あるとき、ねずみのおやが、子  
ねずみをあつめて、いふには、

「このいへには、猫といふ、おそろしい  
けものがゐて、ふいに出てきて、われ  
くふ、われをとつてくふゆゑ、すこしの  
ゆふまも、ゆだんが、できぬ。ゆふべも、  
なかまの大ねずみがくはれた。なにが



その猫めをふせぐ、よい  
くふーはあるまいか。  
といひました。  
子ねずみどもは、  
なにも、よいくふーが  
つかぬゆゑ、だまつて  
ゐました。そのうち、  
一ひきの子ねずみが

いひますに、



「その猫めのくびに、すぐをつけて  
おいたらば、どうであります。さう  
すれば、あるくたびに、ちりんちりん  
と、おとがするゆゑ、猫めのきたのが、  
すぐにしれて、にげるに、つごうが  
ようございませう。」といひました。  
みなく、なるほど、と、かんしん

しましたが、たゞ、猫のくびに、すぐを  
つけにゆくものがない。

どのねずみも、どのねずみも、私が、  
つけにゆかうとは、いはぬ。それゆゑ、  
このそーだんは、むだになつて  
しまひました。

第七 イサマシイ兵士

此 此ノエハ、ワガクニトシナトガ、

時イクサヲシタ時ノ

エデゴザイマス。

此レハ、チョーセンノ

アル大キナ川デ

アリマス。ムカウノ

兵キシニハ、シナノ兵

が大ゼイヨリマス。

士ワガクニノ兵士ガ、此ノ川ヲワタラウ



舟トシマシタガ、ハシモ舟モアリマ

セヌ。ムカウノキシマデ、オヨイデ

エケバ、テキノ舟ガ、

タクサンニアルガ、

テキノ兵ガマモツテ

キルカラ、ダレモ、トリ

ニエカウトイフモノ

ガアリマセヌ。



日本書紀 卷三十一 孝德天皇 三十一

一人  
ソノウチニ、一人ノ兵士が出テキ  
マシタ。ソノ兵士ハ、此ノエニカイテ  
アルヨ一ニ、スグマツ。バダカニナツテ、  
水  
水ノ中ヘトビゴミマシタ。

ソレカラ、一シヨケンメイニオヨ  
イデ、ト一ノ、舟ヲトツテカヘリ  
マシタ。ナント、イサマシイ兵士デハ  
アリマセヌカ。

第八 あめく、小さめ

あめく、小さめ。

どこから、ふつてきた。

「天から、

ふつてきた。」

居  
そのまへは、どこに居た。

「いけに居た。

川に居た。」

日本書紀 卷三十一 孝德天皇 三十一

第九 門のまへの小川

うみに居た。

どうして、天へのぼった。

「天ぴについて、

のぼった。」

これから、どこへ行く。

いけへ行く。

川へ行く。

うみへ行く。」

行

前

第九 門のまへの小川

門の前に、きれいな小川があります。

これは、うしろの小山からながれてくるのでございます。

をと、ひから、

ふりついた大雨で、

をとりひから、

ふりついた大雨で、

ふりついた大雨で、



第九 門のまへの小川

水かさが、大そーふえました。

下 太郎は、川下に、四っ手あみをふせて、魚をとってゐます。

此の川には、どのよーな魚が居ますか。ふな。えび。はえ。なまづ。うなぎなどでございます。

第十 手がみ

母 太郎「母さま、をばさまのここから、

竹 おつかひがまわりました、竹の子と、此の手がみとをもつて。」

母「さうかえ。お手がみをよんでごらん。太郎「はい。」

上 此の竹の子は、うらの竹やぶに、できましたゆゑ、すこしなれど、さし上げます。

花 母「その手がみは、たぶん、お花さんが



かいたので、ありませう。おまへも、ごへんじをおかきなさい。それから、きのふ、おまへがとってきたふなを、おうつりに、お上げなさい。」

次 只 下

太郎は、すぐに、ふでをとって、次のごとく、へんじをかきました。

只今は、竹の子を、たくさんに下され、ありがたうございます。太郎がとりました、ふなを、すこしなから、さし上げます。

第十一 ホタルガリ

太郎が、サ、ヲフリタテ、川下ノ方へ、

方

居見上

ホタルヲオツテ行キマス。  
 三郎ハオヂイ  
 サマニコシラヘテ  
 モラツタ、大キナ  
 ホタルカゴヲモツテ、  
 土手ノ上ニタツテ、  
 見テ居リマス。  
 「ほたる、こい〜」



あまい水やるぞ。

兄

ヤア、兄サマ。ホタルガ、コチラヘ  
 トンデキマシタ。ハヤクツカマヘテ  
 下サイ。ソレ、又、ソチラヘ、ニゲテイッタ。  
 ほたる、こい〜。

あまい水やるぞ。」

第十二 田うゑ

今は、田うゑのさいちゅーで、いとが

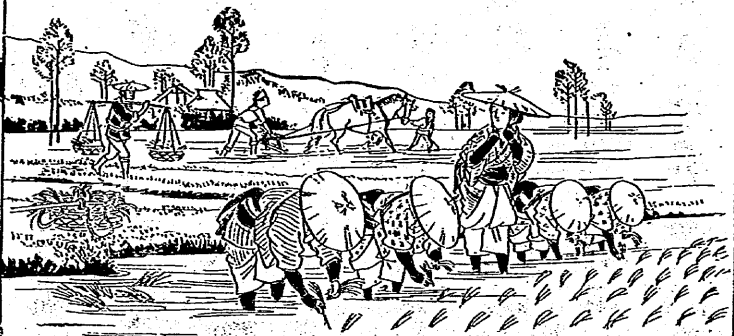


しいじせつでございます。

男 あちらの方では、男たちが馬に  
 田をすかせて居り、こちらの方では、  
 女 女たちが、なへをうゑつけて居り  
 ます。女たちのうたふ田うゑうたが  
 きこえます。

なへのうゑつけがすめば、田の  
 くさとりがはじまる。それもすんで、

秋 取



秋のはじめになる  
 と、ほが出る。そのじ  
 ぶんから、だんく  
 と、水をへらし、田を  
 かわかします。それ  
 から、よくみのるを  
 まって、いねをかり取  
 るのでございます。

豆米

第十三 五コク

米、麥、アハ、キビ、豆、

此ノ五イロヲ、五コク

トイヒマス。ドレモ

ドレモ、大セツナコク

モツデアリマスガ、

ソノウチ、一日モ、ナク

テナラヌモノハ、米ト麥トデアリマス。



キビ、アハハ、ダンゴヤ、モチヤ、アメ  
ナドニハ作りマスガ、マイ日ノタベ  
モノニハナリマセヌ。

豆ハ、ニテタバ、又ハ、イッテタバマス。  
トーフ、ミソ、ショーユナドニモ作り  
マス。豆ハ、米、麥ニツギテ、大セツナ  
コクモツデアリマス。

第十四 あきないごと

買 錢



お花が、梅のみをひろって、くだもの  
 やのみせをひらき  
 ました。おとうとの  
 三郎が、買ひにまわり  
 ました。せには、一錢と  
 かいたつばきのはで  
 ございます。  
 三郎「ごめんなさい。

厘 出

此の梅のみは、いくらですか。  
 お花「はい。ひと山が、五厘でございませう。  
 三郎「ふた山ください。」  
 三郎は、つばきのはを、二まい出し  
 ました。  
 お花「ふた山なら、五厘と五厘とで、一錢  
 ですから、一まいでよろしうござい  
 ます。」お花は、しよーちきでござい

國語訳本 兒童用 卷之三 金部 屋敷

ます。よけいな錢は取りませぬ。

第十五 カザミ

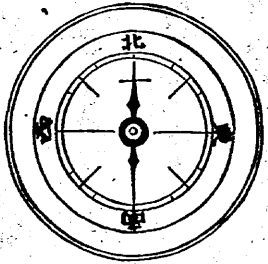
上 東



アノヤネノ上ニ見エル、トリノ  
ヨーナモノハ、ナン  
デゴザイマスカ。  
アレハ、カザミト  
イフモノデアリ  
マス。カゼガ、東

西 南 北 向 左右

カラフケバ、アノカザミハ、西へムキ、  
カゼガ、南カラフケバ、北へムキマス。  
東、西南、北、コレヲ、四方  
トイヒマス。  
アサ日ノ出ル方ニ向ツテ、  
前ニアタル方が、東デ、  
ウシロガ、西デアリマス。ソレカラ、  
右ハ南、左ハ北デアリマス。



國語訳本 兒童用 卷之三 金部 屋敷 十八 合資 富山 房 蔵 版

第十六 にじ

雨のふる前、又はふりやんだあとなどには、にじの出ることがござい  
夕ます。あさのにじは、西の方に、夕方の  
にじは、東の方にあらはれます。  
にじは、たいよーと向ひあってあら  
色はれるのがきまりで、その色は、うつ  
くしいんだらになつてゐます。

赤 一ばん上が、赤

色、その次は、かば  
色、その次は、き、  
その次は、みどり、

青 それから、青、あゐ、

むらさき、といふ

じゆ じゆんになつてゐ

ます。この、赤、かば、



色の七色と云ひます。  
き、みどり、青、ある、むらさきを、にじ

第十七 まはりどーろー (練習文)

日がくれ  
て、たいそー  
すどしくなり  
ました。  
次郎さん、



えんさきのまはりどーろーに、  
あかりをつけて、上  
げませう。ごらん  
なさい。もう、まはり



出しました。それ、ゆーびんはいたつ  
がきました。じんりきじゃが、はしって  
きました。小犬が、あとから、おっかけて  
きます。それ、馬にのった兵たいが、

出てきました。

第十八 ヒライタ〜

オ松サンモ オ竹

サンモ オイデナサイ、

ヒライタ〜ヲシテ

アソビマセウ。

開いた〜、

はすの花が



松

開

開いた。

開いたと

思うたら、

見るまに

つぼんだ。

つぼんだ〜、

はすの花が

つぼんだ。



思

つぼんだ、と思うたら、  
見るまに開いた。

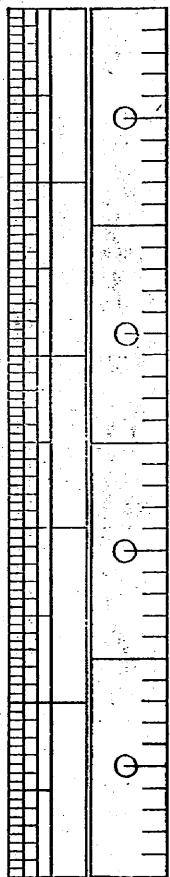
第十九 はす

糸 私は、はすの糸をとらうと思ひ  
切ますが、切れてく、どうしても  
とれませぬ。

昔 昔、ちゅーじょーひめといふおかた  
は、はすの糸で、きれいなおりものを

おこしらへな  
された、とき、  
ました。

私も、はすの  
糸で、人ぎょー  
のおびあげを





會社 月 羽 片  
兒童用

こしらへてやりたいと思ひますけれども、このよーに切れてく、まだ五寸だけでもとれませぬ。

第二十 きもの

鳥羽毛  
鳥には、羽ねがあり、けものには、毛がある。人げんのからだには、鳥のよーに、羽ねもなく、犬や猫のよーな毛もない。それゆゑ、あつさ、さむさに

物



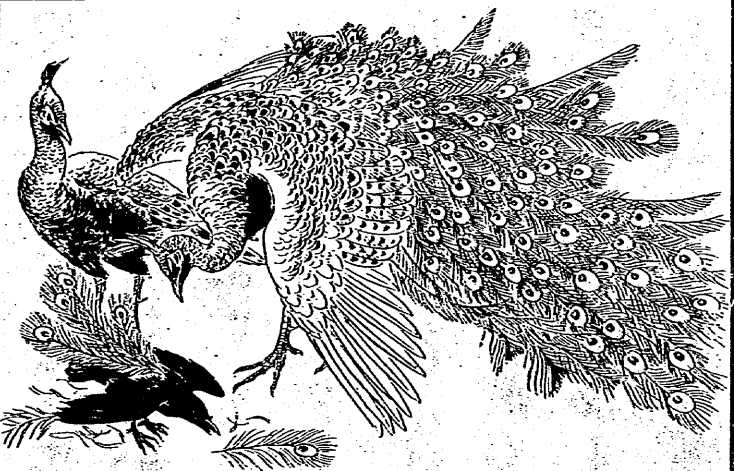
つれて、きものをこしらへて、きねばならぬ。  
あついころには、ひとへ、又は、かたびらを、き、さむい時には、わた入れをきる。又、

十三 合 漢 語 小 考 家 蔵 版

ほどよききこーには、あはせをきる。  
 又、雨がふれば、かつぱをき、ひどく  
 さむい時には、づきんをかふる。  
 き物は、きたり、又、ぬいだり、思ふ  
 よーになるから、羽ねや毛とはちがひ、  
 はなはだべんりである。

第二十一 あほーがらす (練習文)

昔、一羽のからすが、くじやくの



あそんで居る  
 よーすを見て、  
 「よの中には、あの  
 よーな、うつく  
 しい鳥もある。  
 じぶんも、あんな  
 なりをして見  
 たい。」と、うら

やましく思ひました。

そのち、此のからすは、くじゃくのおとした羽ねをひろつて、それを、みにつけて、くじゃくの なかまへはいりました。

はじめは、きがつかずに居ましたが、ほどなく、くじゃくどもが見つけて、おのれにせものめと、くちばしを

そろへて、からすのつけ羽ねをむしり取りました。

からすは、なくく、もとのすにかへりましたが、ともだちのからすも、そのしわざをにくんで、只の一羽も、あほーがらすのあひてに、なるものがごさいませんでした。

第二十二 虫のうた

秋かぜすゞし。

月 月白し。

虫 ろふ こよひもろろふ

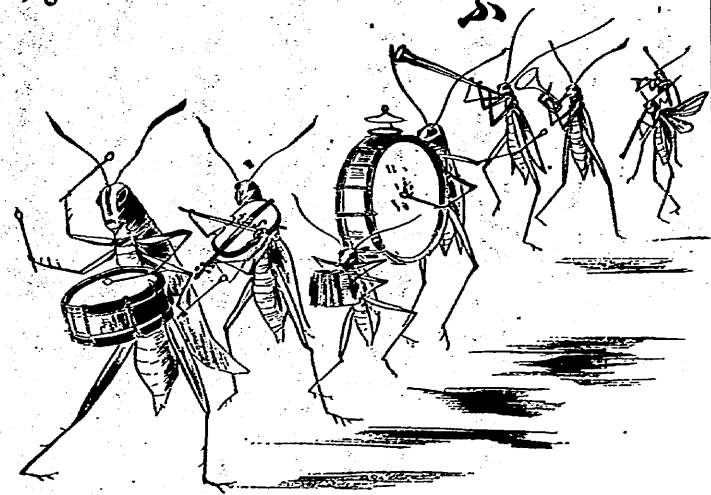
虫 なかま。

松虫、すゞ虫、

くつわ虫、

はたおり虫や、

きりぐす。



チ、ロヤ、チ、ロ、

リンくく。

夜

夜よし。月よし。かぜもよし。

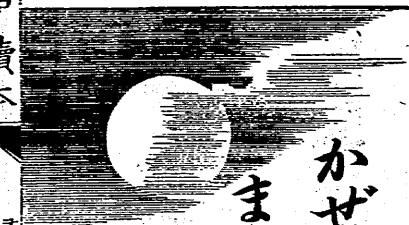
月に、こゑをばはり上げて、

かぜに、羽ねをばふりたて、

まへや、うたへや、もろともじ。

チ、ロヤ、チ、ロ、

リンくく。



第二十三 ミツバチ

足  
アノミツバチヲゴランナサイ。花  
ノ上ニトマツテ、羽ネヲラルツタリ、足ヲ  
ウゴカシタリ、イツガシサウニシテ  
居リマス。アレ、コンドハ、アチラノ  
木ノ花ヘトビウツリマシタ。アツコ  
同  
デモ、同ジヨーニ、ハタライテ居リ  
マス。アレ、又、ソチラノ木ノ花ヘトビ



休  
ウツリマシタ。  
蜂<sup>ハチ</sup>ガ、アノヨーニ  
ハタラクノハ、色々  
ノ花ノシルヲスツテ、  
蜂ミツヲコシラヘル  
タメデアリマス。  
蜂ハ、アツイジ  
ブンニモ、休マズニ

故 ハタライテ、蜂ミツヲタメテオキ  
マス。ソレ故、シモヤエキノフル  
ジブンデモ、タベ物ニハ、フジエー  
イタシマセヌ。

第二十四 二宮金次郎

書物 書物を、ねっしんによんでゐる。此の  
子は、だれでございませう。

これは、あるのーふの子で、二宮

金 金次郎といふ  
こーこーもので  
あります。

父 金次郎は、十四  
の時に、父にしに  
わかれました。

弟 今は、母と弟とが



早朝

ゐるばかりであります。  
家は、びんぼーで、おや子のものが、  
日々にたべる米や、みそさへも、買ひ  
かねることがありました。  
それ故、金次郎は、朝は早く、の山に  
行って、しばをかったり、たきぎをきった  
り、夜は、おそくまで、わらぢをつくり、  
その錢で、米を買って居りました。

書讀



かよーななんじゅーなくらしのうち  
にも、金次郎は、讀み書きをならはねば、  
りつぱな人にはなれぬ、と思ひまして、  
かくもんをはげみました。

しばをかり、たきぎ  
をきつて、かへるみち  
みちも、此の急に  
あるとほり、あるき

K/20.8

先生  
多  
ながら、書物を讀んだとまうします。  
のちよのため、いろいろ、よいこと  
をして、二宮さんとく先生と、多くの  
人にたつとまれた人は、此の金次郎で  
あります。

卷三をばり

明治三十四年十月三十日印刷

明治三十四年十一月三日發行

(國語讀本 尋常小與附)

卷ノ一	定價金八錢	卷ノ五	定價金拾貳錢
卷ノ二	定價金八錢	卷ノ六	定價金拾參錢
卷ノ三	定價金九錢	卷ノ七	定價金拾參錢
卷ノ四	定價金拾壹錢	卷ノ八	定價金拾四錢



發兌元

(明治廿九年六月設立)

編纂者 代表者 發行者 代表者 印刷者 印刷所

高知縣教育會

藤崎朋之

東京市神田區裏神保町九番地

合資會社 富山房

合資會社 富山房社長

坂本嘉治馬

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

仁科衛

同所 厚信舍

電話浪花一四六番

富山房

電話本局 電報 號碼 (ヤマフ)

合資會社 富山房 長距離電話 (電話本局) 電報號碼 (ヤマフ)





